

キャリア教育を考える

昭和 62(1987)年 8 月 7 日の臨時教育審議会第四次答申において、「生涯学習体系への移行」が打ち出され、生涯学習が教育にとって非常に重要な位置を占めるものになりました。Paul Lengrand (1965)は、ユネスコの成人教育推進委員会のワーキングペーパーに「教育は児童期、青年期で停止するものではない。それは、人間が生きている限りつづけられるべきである」と記し、生涯学習の重要性を示しています。その言葉の中には一人一人の過去・現在・未来を尊重すること、すなわちキャリアを尊重することの重要性が含まれているといっても過言ではありません。

ある年の夏、「無言館」¹という美術館を訪れました。「無言館」は、第二次世界大戦（太平洋戦争）に出征し、戦死した画学生の遺作や遺品を展示している戦没画学生慰霊美術館です。そこに展示された遺作に言葉はありませんが、鑑賞者に様々なことを語りかけます。そして、人生や平和について考えることの意味に気づかされるのです。

展示されている作品には、多くの自画像がありました。画学生は、人生の節目、節目で自画像を描き、内なる自己と対話し、自分を見つめ直すことがあります。「無言館」に展示された自画像を描いた学生たちは、やがて訪れる未来をどのように捉え、自分を見つめたのでしょうか。

自画像を描いた画学生の一人、日高安典さんの「裸婦」は、印象に残る作品の一つでした。彼は召集され戦地に向かうぎりぎりまで、この絵を描いていたといいます。モデルとなった女性に「あと 10 分でもいいからこの絵を描き続けていたい。生きて帰ってきたら必ずこの続きを描くから。」と言い残して出征したそうです。そして、終戦間近の昭和 20(1945)年に日高さんはルソン島で戦死します。享年 27 歳でした。

「無言館」を訪れると、脳裏に浮かぶのが学徒出陣です。日本は、兵力不足を補うため、高等教育機関に在籍する学生を在学中で徴兵し出征させました。その第 1 回出陣壮行会は、昭和 18(1943)年 10 月 21 日に「明治神宮外苑競技場」で行われました（台北でも同日に第 1 回出陣壮行会が行われています。）。その会場となった「明治神宮外苑競技場」は、「新国立競技場」と同じ場所に位置していました。新国立競技場が令和 3(2021)年に延期・予定されている東京オリンピック・パラリンピックのメイン会場であることは誰もが知るころでしょう。「学徒出陣壮行会」が行われた地で、平和の祭典であるオリンピック・パラリンピックが開催され、世界の人々がつながることには、非常に意味深いものであると思います。

キャリア教育を考える時、単にキャリア発達を促す教育に留まることなく、過去・現在・未来の意味や平和についてしっかりと向き合わせ、その脆さを感じ、自ら考え、行動する力

を育成する必要性を強く感じます。「無言館」は、そのようなキャリア教育の在り方について見つめ直させてくれる空間でした。

今回は、私のキャリア教育に対する私感を書かせていただきました。次回は、研究という視点から、考えていこうと思います。

引用文献

Lengrand, P. 1965 Lifelong Learning. Journal of education, 9(3), 1-11.

(上越教育大学 山田智之)

ⁱ 無言館：長野県上田市大字古安曾山王山3462 電話：0268-37-1650
JR／しなの鉄道・北陸新幹線「上田駅」にて乗換、上田電鉄別所線「塩田町駅」から徒歩30～40分（4～11月はシャトルバス有り）